

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 17 日現在

機関番号：37402

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23730597

研究課題名(和文) サンクションの成立基盤に関する理論的実証的検討

研究課題名(英文) Theoretical and experimental study on adaptive basis of sanction.

研究代表者

真島 理恵 (MASHIMA, Rie)

熊本学園大学・商学部・講師

研究者番号：30509162

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、サンクションの適応的基盤の解明を焦点とした質問紙調査と実験室実験を行った。その結果、サンクションが私的に行われた場合には、サンクション内容(罰・報酬)がサンクション従事者の評判を大きく左右するのに対し、公的システムへの貢献として行われたサンクション行動は、内容にかかわらずサンクション従事者にポジティブな評判をもたらすことが明らかとなった。更に、公的システム成立に際しての人々の合意の有無は、公的システムの機能に影響しないことが明らかにされた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the study was to investigate the adaptive basis of sanctioners (i.e., those who engage in sanctioning). The results of a series of vignette experiments and laboratory experiments showed that the reputation of individual sanctioners differed depending on the method of sanction (punish or reward), while collective sanctioners received positive reputation regardless of the method of sanction. The results also suggested the possibility that the existence of agreement upon the introduction of the collective sanctioning system did not influence the function of the system.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：社会的ジレンマ サンクション 罰 報酬 協力

1. 研究開始当初の背景

大規模な集団における相互協力を通じた秩序の自発的達成は、人間を他の動物種から隔てる最大の特徴にして、人間社会の根本的基盤のひとつである。「個人にとっては利己的に振舞う(非協力する)方が得であるにも関わらず、なぜ人々は協力し合えるのか」という問いに対する最もよく知られた解決策が、罰もしくは報酬により「非協力の方が得」という利得構造そのものを変えるという方法である。もし「非協力者が罰を受ける」もしくは「協力者に報酬が与えられる」仕組みが存在するならば上述の利得構造は逆転し、協力が個人にとっての合理的行動となる。このようにして利得構造を変換する方法はサンクションと呼ばれ、相互協力達成問題における強力な解決策としてその重要性が指摘され、実際に人々が自発的にサンクションに従事すること、それにより相互協力が促進されることが、数多くの実証研究で報告されている(e.g., Fehr & Gächter, 2000; Yamagishi, 1986)。しかし理論的には、この解決法には「誰がサンクション実効化のためのコストを支払うか」という大きな問題点がある。サンクションを実効化し、協力が合理的となる利得構造を実現するためには、誰かが罰もしくは報酬を行使するコストを負わなければならない。つまりサンクションを実効化する行動(サンクション行動)は、個人にとっては非合理的行動なのである。よって、そもそもサンクションがなぜ、いかにして自発的に実効化されるのかという最も重要な問いは未だ理論的にはパズルとして残されたままである。この問いに対し本研究では、人間をサンクション行動に従事させる心理・行動傾向は、結果的に行為者本人に利益をもたらすために社会的に獲得されてきた適応的特性であるとの視座に立ち、サンクションの実効化を可能とする人間の心理基盤を特定するとともに、そのような心をもつこといかなる仕組みにより適応的となるのかを解明することを目指す。

2. 研究の目的

サンクション従事者に将来利益をもたらす仕組みとして本研究が目指すのは、評判である。サンクション従事者は「強い公正感・協力性の持ち主」「集団のために努力するリーダーシップの持ち主」などの評判を獲得し、結果的に「社会的交換の相手として望まれる」「社会的地位を得やすくなる」「競争場面で有利となる」などの将来利益を獲得可能であると考えられる。このアイデアは近年注目を集めつつあり、サンクション従事者が他者からどのような評判と将来利益を獲得するかを焦点とするいくつかの実証研究が、理論研究(ただし決定的な回答は未だ提

出されていない)に加えて実施されている。しかし、ある研究ではサンクション従事者が信頼できると評価され社会的交換や利他行動の対象として選ばれやすいという結果が得られた一方で(e.g., Barclay, 2006; Mashima & Takahashi, 2008; Nelissen, 2008)、別の研究ではサンクション従事者は怒りっぽい人物としてネガティブに評価され敬遠されることが示される(e.g., Kiyonari, Barclay, 2008; Horita, 2010)など一貫しておらず、統一的な結論は得られていない。本研究では、このような混乱を招いてきた最大の原因は、これまでの研究があらゆるサンクションを区別せず一括りに扱ってきたことにあると考える。本研究では、サンクションが適応的となり得るか否かは、サンクションのタイプによって異なるという新たな視点を提唱する。一口にサンクションと言っても罰か報酬か、私的制裁(報酬)か公的制裁(報酬)かなど様々なタイプが存在するが、「報酬を与える」行動は協力的心性に帰属されポジティブな評判形成に結びつく一方で、「罰を与える」行動は八つ当たりや怒りっぽい心性に帰属されネガティブな評判をもたらすなど、人々がサンクション従事者に対して与える評判は、タイプによって大きく異なることがある。にもかかわらずこれまでのサンクション研究では、こうした違いにはほとんど注意が払われず、複数の異なる適応基盤に立脚するかもしれないサンクションを区別せずに扱ってきた。そこで本研究ではこうした混乱を排し、サンクションをその構造的特徴により分類する基本軸を作成し、人間社会においてどのタイプのサンクションが各々いかにして自己維持的に成立しうるのかを解明することを目指す。

3. 研究の方法

本研究ではまず、サンクションを分類する基本軸を作成し、種々のサンクションの中から、現実に適応的システムとして成立しているサンクションタイプを、実証の手がかりをもとに絞り込むことを目的とした質問紙調査を実施する。まずサンクションの基本的構造特徴である「罰か報酬か排除か」「実効主体が個人か公的システムか」という軸に基づき、サンクション従事者が良い評判を得るかどうか(適応的となるかどうか)を左右する要因を絞り込む。サンクションのタイプを条件として操作した質問紙調査を実施し、タイプごとに「サンクションがどの程度人々の協力意図を促進するか」「サンクション従事者がどのように評価されるか」を測定する。その結果に基づき、適応的と目されるサンクションのタイプを特定する。

更に本研究では、質問紙調査から特定された、適応的かつ協力促進機能を備えると目さ

れるタイプのサンクション従事者が、実際のコストを伴う相互作用場面において他者からどのような評価を獲得するのかを、実験室実験を用いて検証する。適応的と目されたタイプのサンクションにおいて、コストをかけてサンクションに従事する者が非従事者よりも良い(すなわち適応的な)評判を獲得することが確かめられた場合、サンクション従事行動、及びサンクション従事者に良い評判を割り当てる人々の心理基盤を特定し、それらを変数として組み込んだサンクションの成立基盤のモデルを作成する。

4. 研究成果

サンクション従事者の評判を測定する研究はこれまでも報告されているが、同一のシナリオや測度・パラメータを用い、サンクションの実行主体と内容をシステムティックに操作して比較した研究はこれまでになかった。そこで本研究ではまず社会的ジレンマにおける様々なタイプのサンクション従事者の評判を測定する一連の質問紙調査を行った。具体的には、サンクションの内容(罰・報酬・排除)とサンクションの実行主体(個人・公的システム)を操作したシナリオを作成し、各シナリオに登場するサンクション従事者に対して抱く印象を測定する質問紙調査を実施した。その結果、まず、サンクション内容が排除(非協力者につきあわない)である場合、いずれの条件においてもサンクション従事者はポジティブな評判を獲得しなかった。この結果は排除は罰・報酬とは異なり、少なくとも意識的・明示的な規範の中では適応的サンクションではないことを示唆する結果である。この結果に基づき、以降の検討では排除を除くサンクション内容に絞り込むこととした。さらに、より重要な発見は、サンクションの内容(罰・報酬)がサンクション従事者の評判に与える影響が、サンクションの実行主体が個人か公的システムかにより質的に異なるという、これまで明らかにされてこなかった新たな知見が見いだされたことである。個人的に行われる私的サンクションの場合、サンクションの内容(罰・報酬)がサンクション従事者の評判を大きく左右する(罰従事者は公正だが近寄りやすく、報酬従事者は公正ではないが付き合いやすい)一方で、成員が公的システムにお金を払ってサンクション実行を委託する「公的サンクション」従事者は、内容に関わらず良い評判を得ること システムには、サンクションを正当化し従事者の評判を底上げする機能があることが明らかにされた。この結果は、個人が行う場合にはネガティブな評判をもたらす、ひいてはサンクション従事者の適応度を引き下げる可能性のあるサンクションであっても、公的サンクション制

度の導入により、サンクション従事行動が常に適応的となる可能性を示唆する結果である。このような、サンクション従事者の適応度に対するシステム導入の強力な効果を明らかにしたことが、本研究の成果である。

更に本研究では、公的システムがサンクション従事者の評判を底上げする装置として機能する鍵が、人々がシステムの背後に暗黙に想定する「サンクションは皆から合意されたものだ」という合意認知にある可能性に注目し、合意認知がサンクション従事者の評判に与える影響を調べる質問紙調査を行った。ただし分析の結果、質問紙では合意認知を十分に操作できないことが明らかとなったため、参加者自身がシステム導入に際しての合意形成に実際に参加したうえで、コストを伴う意思決定(社会的ジレンマとサンクション行動)に従事し、サンクション従事者と非従事者に対する評価を測定する集団実験を実施した。参加者は約20名1グループとなり、システムを導入した社会的ジレンマに参加した。サンクション内容とシステム導入時の合意の有無(投票で導入/強制導入)を操作した。実験の結果、サンクション従事者の評判・SDの協力度・サンクション実行度のいずれにも合意の効果はみられなかった。本実験の結果は、公的システムが有効に機能する上で、それが「民意に基づき導入された制度」であることはさほど重要ではない可能性を示唆するものである。社会心理学における意思決定研究はもちろん、政治学など様々な分野において、制度の導入にあたって公正な手続きを遵守することが制度の有効性を保証するという議論は自明の前提とされてきた。しかし本研究の結果は、合意形成という公正な手続きを遵守することの効果は、少なくともサンクション制度においては実は小さい(あるいはない)という、これまでに全く気付かれてこなかった意外な可能性を示唆するものである。すなわち、少なくともサンクション制度においては、制度がどのような方法で導入されたかにより、導入された制度の有効性は影響を受けないという可能性である。極論すれば、もし制度導入の方法による影響が一切ない(いかなる形であれ導入さえしてしまえばサンクション制度は機能する)のであれば、サンクションの自発的出現の仕組みを解明するうえで、制度の有効性を保証する要因として、これまでは暗黙のうちに重要な要因と目されてきた手続き的公正以外の要因を新たに検討する必要があるといえよう。このように、これまで自明と考えられてきた手続き的公正を遵守することの効果に対し、少なくともサンクションのドメインにおいてはそれを前提とすべきではない可能性を示唆する実証的証拠を示したことも

また、本研究の重要な意義である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 0件)

[学会発表](計 10件)

真島理恵・高橋伸幸, 内生的・外生的サンクショニングシステムにおけるサンクショナー評判の実験的検討 人間行動進化学会第6回大会, 2013年12月7日-12月8日, 広島修道大学

真島理恵 サンクショナー評判に対する合意の効果の実験的検討 日本社会心理学会第54回大会, 2013年11月2日-11月3日, 沖縄国際大学

Rie Mashima & Nobuyuki Takahashi, Experimental examination of reputation of collective sanctioners. 学会名: The 15th International Conference on Social Dilemmas, 2013年7月10日-7月13日, Zurich

真島理恵・高橋伸幸, システムサンクション従事者の評判についての実証的研究 人間行動進化学会第5回大会, 2012年12月1日-12月2日, 東京大学駒場キャンパス

真島理恵, サンクショナーの評判に対する合意の効果 日本社会心理学会第53回大会, 2012年11月17日-11月18日, つくば国際会議場

Rie Mashima & Nobuyuki Takahashi, Experimental examination of reputation of individual sanctioner and two types of collective sanctioners. The 24th Annual Meeting of Human Behavior & Evolution Society, 2012年6月13日-6月17日, Albuquerque

真島理恵・高橋伸幸, サンクションの種類による、サンクショナー評判の比較 学会名: 第4回日本人間行動進化学会大会, 2011年11月19日-11月20日, 北海道大学

真島理恵・高橋伸幸, サンクショナーの評判についての実証的検討: サンクションの分類による比較 日本社会心理学会第52回大会, 2011年9月18日-9月19日, 名古屋大学

Rie Mashima & Nobuyuki Takahashi, Reputational benefits of sanctioners. The 14th International Conference on Social Dilemmas, 2011年7月5日-7月9日, Amsterdam

Rie Mashima & Nobuyuki Takahashi, How do people evaluate different types of sanctioners? The 23rd Annual Meeting of Human Behavior & Evolution Society, 2011年6月29日-7月3日, Montpellier

[図書](計 0件)

[産業財産権]
出願状況(計 0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者
真島 理恵 (MASHIMA, Rie)

研究者番号: 30509162

(2)研究分担者
()

研究者番号:

(3)連携研究者
()

研究者番号: